『PHESE』No.132、電源開発、2004年春号、pp.20-21.

パリの本屋にて

今橋映子

Arthur Binard
詩人。1967年米国ミシガン州生まれ。90年、コルゲート大学卒。卒論で日本語に出合い、この年来日。日本語で詩作、翻訳を始める。01年4月詩集『釣り上げては』で中原中也賞受賞。絵本『カエルのおんがくたい』『トロピカルショッピングセンター』など。最新刊の初のエッセイ集『空からやってきた魚』も好評。

十二時間の飛行機で疲れ切り、このところは大抵夜も明けないパリに到着する。そしてようやく六時頃、短期貸しアパートに辿り着いた私が、部屋に入ったなり先ずすること――それはラジオに直行してチューナーを「フランス・ミュージック」の局に合わせ、それを聞きながら朝食用の「おかゆ」を炊くということだ。穏やかなバロック音楽が、朝のさわやかで冷たい空気を、一気にもやもやした頭の中に流し込んでくれるような気分。疲れた胃には朝からクロワッサンとカフェ・オレ、なんてどこかの雑誌に載っているような洒落た図には到底なれない。それでも音楽の合間に流れるフランス語で耳をリハビリし、少しずつパリ時間に調整していく一日が始まる。初日は仕事を入れず買い物だけ。水のペットボトルを三本は買わなきゃと、すっかり日常生活に埋没である。

比較文学比較文化を専攻し、パリという都市が外国人芸術家たちによっていかに神格化されたかを研究テーマにしている関係上、私のパリ滞在は大抵、仕事と調査のためである。だから東京生活の延長のようできわめて散文的なのだが、考えてみれば東京では、休日に一個一個、紙に包んである。食べるときはてっぺんの蕚を取り、甘くとろける中身をスプーンで掬う。

アメリカにも、実はイタリアの"cachi"と近縁種の果物がある。スーパーではあまり見かけないが、農産物品評会などでたまに並べてあり、原住民のアルゴンキン族の名称"persimmon"が、そのまま英語になっている。

ぼくは何となく、アメリカからヨーロッパへ運ばれて見違えるほど品種改良を加えられ、しゃれたイタリアン・ネームもつけられたのだろうと思い込んでいた。ところが、来日して数カ月経った秋の或る日、アパート近くの八百屋の店先に"cachi"を髣髴とさせる果物が並べてあるのを見つけた。一個を手に取り、「これは何ですか?」

野菜果物について、ぼくから根掘り葉掘り聞かれることにもう慣れたご主人は笑い、「それはカキだね」といった。「日本語でもcachi? もしかしてイタリアから?」「いや、ニッポンのだよ。そいつは静岡のジロウガキ」。そのとき、ご主人に「柿」の漢字と、大きく分けて渋柿と甘柿と二種類あるということも教わった。甘柿の「次郎柿」を一山買い、初めて歯ごたえのある"cachi"を頬張った。

その後、中央図書館で英語のエンサイクロペディアと日本語の百科事典を引いて、大まかな柿の流れがつかめた――十九世紀に中国と日本から、渋柿が欧州へ導入。そのころからヨーロッパ人はもっぱら「熟柿」で賞味。イタリア語の"cachi"は日本語からの外来語。アメリカガキこと"persimmon"は北米原産だが、やはり十九世紀後半に日本の柿もカリフォルニアへ渡り、生産量は少ないながら今でも栽培されている。"kaki"とも"Japanese persimmon"とも呼ぶ。八百屋で、知らない英語も教わっていたのだ。

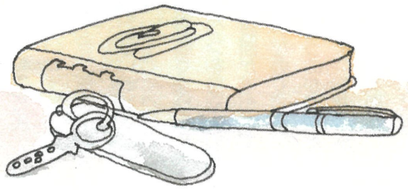
クリスマスに一時帰国したとき、上等な干し柿を二箱もスーツケースに入れて、親戚と友人に振る舞った。まず"What is this?"とクイズを出してから、味見してもらったが、正解の"kaki"も"persimmon"も、だれひとり当てられなかった。気に入って"One more, please."と頼んで来たのは、三人に一人程度だったか。

でも朝からラジオなんて滅多に聞かない。やはりいつの間にかパリ生活の基本パターンを、東京とは別につくっているのだろうか。

パリに居ると東京と最も違うのは、実によく街歩きをするということだろう。もちろんこの二つの都市は余りに規模が違いすぎる。私は東京郊外に生まれ育ち、今でもそこに住んでいる関係上、電車で一時間以上移動するのは当り前になっているので、むしろ都内ではあまり歩いていないような気がする。その点パリでは、メトロの隣り駅に行くには歩いた方が早いので、必然的に散歩距離が延びていく。この街は意外にも排気ガスがひどいので、夏に長時間の外出は堪えるのだが……。

今から十数年前の留学中は、エッフェル塔まで歩いて三分という地区に住んでいた。その周辺はパリでも一、二を争う高級住宅街なのだが、私が部屋を借りた通りは、かつてエッフェル塔を立てた職人さんたちが住んでいたという、いたって庶民的な界隈だった。大阪から遊びに来た友人は、その近くのスーパーのワイン売場で、買い物に来ていたフランス人をつかまえて、「おっちゃん、一番安くてうまいワインはどれや?」と大阪弁で聞いたら、「ほんならこれや」と一本選んでくれた――と眉つばものの話を得意気に報告してくれた。けれども確かにそれはサン=テミリオンという、麦わらの香りのように素朴で、しかも風雅な種類のワインだったのである。値段も実に適正――大阪人の街歩き恐るべしであった。

IMAHASHI Eiko
東京大学助教授。東京生まれ。学習院大学卒、東京大学大学院博士課程修了。パリ第四大学大学院博士課程で学びD.E.A.取得。日本学術振興会特別研究員、筑波大学専任講師を経て現職。著書『異都憧憬　日本人のパリ』でサントリー学芸賞受賞、他に『パリ・貧困と街路の詩学――1930年代外国人芸術家たち』など。



さて私にとって街歩きの何よりの醍醐味は、本屋を次々と見て回ることである。今でこそ洋書の購入はインターネットで夢のように楽になったが、やはり本屋でゆったりと時を過ごしつつ、思いがけない本に出合える愉しみは何にも代え難い。

数年前に、一九三〇年代パリ亡命作家の研究をしていた時、私がパリで探していたのはヨーゼフ・ロート（一八九四―一九三九）についての文献だった。ロートは日本ではいまださほど知名度は高くないが、オーストリアのドイツ語作家である。現在のウクライナに近い東ガリチア出身のユダヤ人で、ジャーナリストであったが、ナチスに追われてパリに亡命した。彼は良質な小説家であり、遺作となった短篇『聖なる酔っぱらいの伝説』（白水社Uブックス）では、ある浮浪者にパリで起こった奇蹟の話を書いた。

主人公に二百フランを恵んでくれた紳士は、もしお金を返す気があるならば、自分が信仰しているサント・マリー礼拝堂に返してくれれば良い、と言い残して立ち去る。人が良くかつては働き者であった浮浪者アンドレアスは、毎週ミサの時にそのお金を返そうと思うのだが、人に酒をおごったり自分も飲んだりと、結局使ってしまう。けれども三度目の正直、教会の前の酒場で聖女のような少女に出会い、彼がようやくお金を返そうとする瞬間に、彼はこと切れるのである。そして本当に驚くことにこの小さな物語を完成させてほどなく、ナチスとの戦いと多量の飲酒で肉体を使い果たした作家ロートもまた、行きつけのカフェで倒れて亡くなってしまう。パリに客死したロートの生涯と、その美しい短編小説とのあまりの符合に、私たちは言葉を失う。

ドイツ語作家であるだけに、彼に関するフランス語研究文献を探すのに苦労していたある日、カルティエ・ラタンの小さな良心的な書店で、充実した伝記をようやく見つけることができた。珍しくレジに列が出来ている。順番を待ちながら手にした本を、わくわくしながら眺め始めた途端、「良い本をお買いになりましたね、ロート伝としては優れた本ですよ」という声が後ろからするではないか。振り返ると五十代の紳士がにこやかに笑っている。学者風か、あるいはフランス書評雑誌で有名なあの批評家では? と一瞬見間違えた風貌の人であった。地味なロートの本などを、しっかりと握りしめている珍しい東洋人に思わず声をかけたくなったのだろう。まさにロートが取り結んだ縁としか言いようのない、そんな雨上がりの午後の出来事だった。